

戸川昌子傑作シリーズ＝
赤坂禁猟区



戸川昌子傑作シリーズ=3

赤坂禁猟区

講談社

戸川昌子傑作シリーズ = 3 — 赤坂禁猟区

© 1966 MASAKO TOGAWA

戸川昌子

280円

発行者 野間省一

印刷所 (株) 豊国印刷

東京都文京区大塚坂下町 114

製本所 (株) 藤沢製本

東京都千代田区神田三崎町2-3

発行所 (株) 講談社

東京都文京区音羽町 3-19

昭和41年2月20日／第1刷

Tel 東京 (942) 1111 (大代表)

振替 東京 3 9 3 0

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

目次

赤坂禁猟区

7

燃焼の記

21

闇の中から

35

白い密林

57

大いなる幻影

95

あとがき

212

写真 装幀

秋山 眞鍋
庄 銅
太 博
郎

戸川昌子傑作シリーズ = 3

赤坂禁猟区

赤坂
禁
猟
区

「頼んだよ。商売女は駄目。今夜来るのは大切なお客さんだからね」

デスクの前のバースは、金色の生毛（きげう）の密集している右手をのばすと、小指をつきだして見せた。達者な日本語である。

また女か——沖津はいささか憂鬱になった。

海外から商取り引きの外人客が来るたびに、夜の接待役は沖津に押しつけられる。ナイト・クラブ、芸者、富士山、天ぷらと、おきまりのコースを案内したあとで、結局最後は女である。

そのたびに、沖津の頬がそげ落ちる。

たいていのお客には、適当に商売女をあてがってお茶を濁すが、客が日本に何度も来ていると、同じ趣向では満足しない。お腹のつきでた中近東の人間が、素人娘を欲しがる。それもきまって十代の、沖津から言わせればまだ青くさい女の子をよろこぶのだ。

「では、アパートの支度は念入りにね」

一

「オーライ、最善をつくします」

沖津は英語で答えると、バースからアパートの鍵を受けとった。

部屋を出るとき、胸のポケットの上を自然に押えていた。この手帳の中から、適当な女の子を選ぶより仕方がないのである。

沖津はこの二年ほどのあいだに、六本木や赤坂界隈に出没して外人と遊んでいる女の子たちのリストをつくっていた。

リストといっても、名前と連絡先の電話番号をひかえている程度である。自宅の場合もあったが、むしろ女たちが出入りしている喫茶店やバーの電話のほうが多かった。だから、すぐにつかまるといふわけにはいかないのだ。

それにリストの女の子たちは別にお金だけが目的でなしに、外人とホテルやナイト・クラブに行くムードを楽しんでいるのだから、すべてが気まぐれなのである。

沖津はバースに呼ばれて、今度の特別接待のことを言われたときから岡本多美子の顔を頭に浮かべていた。

結局、急なときは多美子を利用する以外、仕方がないのだ。

それほど、多美子は荒れていると言えた。どんな相手にでも、白人なら首を横に振らない。先月も沖津が頭を下げると、ほかに口をかけた女の子が全部こわったのに、多美子だけはだまって七十歳近い白人の相手をした。

そのかわり、沖津は交際費の中から五千円ぐらい、出来るだけまとまった金額を報酬として別に渡している。

多美子のところへダイヤルを廻すと、母親が出てきて最初不愛想な声を出したが、沖津からの電話だとわかるとすぐに語調を変えた。

「あらお久しぶり、多美子はいま出かけているんですよ」

「何時頃、お帰りになりますか」

「さあ、英会話の学校へ行くとか言ってたけど……」

「実は、お嬢さんを、ご紹介したい向うの方がいるんですがね……」

「そうですか、いつもすみませんね。沖津さんのおかげで向うの立派な方とおつきあいできるって、いつも喜んでるんですよ」

終戦後、進駐軍相手のバーをして、外人崇拜が頭にこびりついている母親は、なにも知らずに喜んでゐる。受話器の前で、肥った体をゆすりながら目を細く

している多美子の母親を想像すると、沖津はなんとなくやりきれなくなった。

「それじゃあ、あとでまた電話をしますから、連絡先を聞いといてください」

よろしく願ひしますと繰り返す母親の言葉にうんざりしながら、沖津は電話を切った。

多美子がつかまらなければ、ほかの女の子をさがさなければならぬのだが、とにかく渋谷のマンションにいて、部屋の掃除することにきめた。

沖津が桜が丘に行くと、バスがここの一週間ほど使っていないというだけあって、しめきった部屋はしめっぽく黴くさかった。渋谷の桜が丘にあるＴマンションの一室は、バスがふだん自分の情事のために借りていて、今日のような特別な客のときに提供するのである。

ガス・ストーブの火をつけ、バスの自動湯沸し器の調節をして、客が来たとき部屋がすぐに使えるように手早く用意する。

慣れたこととはいえ、ベッドの支度をするたびに、沖津は不快になる。ダブル・ベッドのシーツを、糊のきいた真新しいのと取りかえると、シーツに小さなしみや、ちぢれた細い糸のような毛が何本も落ちてゐるのが自然に目に入る。バースのか金色の髪が枕にから

んでいる。

沖津はそれをまるめると、乱暴に洗濯籠の中に投げこんだ。こんなことは、臨時のハウス・キーパーをやとってやらせればよいのと思うが、バースはケチで、たいていのことは沖津にやらせてしまう。

最後に、枕もとのサイド・テーブルの引き出しをあけて、避妊用の薬品が入っているかどうかをたしかめる。

銀紙の包みが、一月前に沖津が入れたままの状態に残っている。どうせ、こんなものは使わないのであろう。しかし、妊娠したらどうするつもりなのだろうか。と、沖津は相手の女のことを暗い気持ちで考えてしまふ。

それとも、こうしたものを必要としないほど、彼等の情事はすさまじいのだろうか。

沖津が、はじめてこの部屋のベッドの支度をしたときも、女は岡本多美子だった。二年前に沖津が、多美子とロサンゼルスから来ていたR商事の四十歳になる高級社員を、この部屋に送りこんだのである。この部屋に来るまで多美子は、この外人から英語を習えるものとはばかり思っていたのだ。

あのときが、多美子にとってはじめての経験だったのだろう、バースの命令でセツトしておいた録音機

に、翌朝、多美子の母親を呼ぶ声と、いたいたしいまでの呻き声ともつかない、長くのびたすすりなきが録音されていた。

あれから回を重ねるたびに、多美子の声にふくみ笑いのようなものがまじるようになり、最近ではどんな相手にでも、平気で「Come¹」というような露骨な言葉を叫ぶようになっていく。

沖津は煙草に火をつけると、壁にかけた風景画のうしろにセツトしたマイク・ホンの位置を調べた。

バースはこの部屋の情事の録音に、病的な執着を示している。事実、このテープを相手に贈呈することによって、商談がうまくいったり友情が深まったりするらしい。

沖津はいつも、彼等がかも撃ちの話をするときのように、すでに関係の出来た女の体について情報を交換し合っているのを、よく聞いた。

ひとりの女を、グループでたらいまわしすることを何とも感じていないどころか、むしろそれを楽しんでいるかのようにみえる。

最初は愛の言葉で釣っておき、倦きるとすぐに冷たいそぶりをみせて捨てるのだ。グループの次の一人が慰め役になって、失恋の痛手をやさしく慰めてやる。女がこれにひっつかれば、あとは泥沼だ。相手の裏切

りを賣めても、「ユーのほうでも、他の男と寝たではないか」と逃げられてしまう。

お金も貰えず、ピンポン玉のようにあっちへやったりこっちへやったり、もて遊ばれるだけなのである。こうなるとだまされたと思いたくない女の気持を支えるのは、外人とつきあっているというプライドだけだ。

彼女たちはますます頑固に、外人とだけつきあうようになり、自ら深みにはまってゆく。

沖津はテープ・レコーダーに新しい長時間用のテープをセットすると、ベッドの下のいつもの位置に戻した。

そして、ドアに鍵をかけながら、嫌悪感が**おりの**ように、心の底に沈澱して行くのを感じていた。

二

十一時半を過ぎて地下鉄がなくなる頃をさかい目に、赤坂界隈の表情が変る。

表通りに面したガラス張りの喫茶店にも、いつのまにか見物がてらのふりの客にまじって、ビデオ撮りを終ったテレビ局の連中とか、銀座のクラブから流れてきた女給連れとか、新聞や雑誌でよくちよく見かける有名人などの顔がみられるようになる。

外人客の姿が目に見えて多くなるのもこの頃だ。

近くのナイト・クラブのショーに出ている、目のさめるような金髪の外人の踊り子が二人、仲よくスバゲッティをつめこむのを、隣の席の中年の外人客がしきりとウイंकを送りながら眺めている風景など、すこしも珍しくない。

明滅するイルミネーションが舗道に映り、通りにはこれみよがしの派手なスポーツ・カーが乗りすてあるかと思えば、一方では客を拾おうとするタクシーがひしめきあっている。

「いやんなっちゃうわ、こう人が一杯いたんじゃ、注文もとりこやしない」

道路ぎわの席にすわって表の様子を見守っていた弓子が、隣の席の多美子に言った。

二人とも、年は二十歳である。多美子の方がずっと、男好きのする派手な顔だちをしている。

「あたしたちが遊んでいたころは、こんなことなかったわ。ホテルのロビーでなきゃ、落着きやしない。沖津も、なんでこんなところに呼び出したんだろうね」
多美子が唇を曲げて沖津と呼びすてにした。

つけまつ毛をした多美子の目には、頹廢的なげりがある。この年で男の体をよく知っているのだから無理もなかった。それも今まで一緒に寝た男たちといえ

ば、みんな髪の毛の赤い外人ばかりなのである。

ボーイがやっと注文をとりに来たとき、長身の沖津が外人を二人連れて、タクシーから降りて来るのが見えた。

「あたし、チキン・バスケット。弓子もそれにしない」

弓子が一番安いアイスクリームを頼んでいるのを見て、多美子が言う。沖津が来たのだから、もうすっぱかされる心配はない。なるべく高いものを頼んで、とられたぶんをとり返してやるんだという気持になる。

沖津には、今まで何やかやうまいことを言われて騙されてきた。妻子のいない、身もとの確実な外人だと紹介されてつきあってみると、最初は結婚話をちらつかされて、うまく体を奪われてしまう。結婚を餌にして、金を払わないだけによけい憎い。そんなことを重ねてきただけに、今ではなんでも金で取り引きしようという気持にわりきっている。

沖津たちは入口で、多美子たちをさがしていた。店の中は、テーブルが全部ふさがっていてボーイたちが右往左往している。

お客たちのお喋りで、喧噪が渦巻いている。

沖津が気がつくだろうか。

「あれよ」

多美子が弓子に顎をしゃくって教えた。

「入口で立っている三人連れ？」

「そうよ、日本人が沖津って男。外人は二人ともはじめて見る顔だけど……」

「若い金髪の男のほう、割合にハンサムね」

弓子が、もうはしゃいだ声を出している。

「おかしいな。もう一人のあれ、どこの国かしら、白人じゃないわよ」

多美子はそう言いながら、いやな予感がしていた。一度、東南アジアの貿易商だという中年の男を押しつけられて、ホテルに入ってからむりやり逃げて来たことがある。白人以外はどうもなじめないのだ。

金髪とチューインガムとラックスの匂いのする白人なら、お伽噺おとぎばなしの中にいるように自分をごまかすことができる。人種がちがってくると、もし日本人が相手でも、自分がおちたような気がするのである。

「そうね、どこの国かしら。でも話すだけならいいじゃない」

弓子がのんびりした声を出した。これからどのようななりゆきになるのかまるで知らないのだ。お茶を飲んで、英会話の勉強でも出来ると簡単に考えている。

「フン、馬鹿にしてるわ」

多美子が言ったとき、沖津が二人の席をみつけて近

づいて来た。

「こちらウイリアムさんに、ホマさん」

沖津が二人に客を紹介した。

「お二人とも、うちの会社のお客さんで信用できる方たちだから、日本にいるあいだ、よろしく交際してあげてください」

「日本にはいつまでいるの」

「昨日着いたばかりだから、まだ半月近くいますよ」

金髪の若いほうの男は、なかなか愛想がよい。弓子に気が入ったらしく、さかんに早口の英語で喋りかける。

もう一人のホマと呼ばれた色の黒い男は、背広の前をだらしなくはずし、椅子の背にもたれてだまつている。椅子からはみ出した大きな体が気怠そうだ。

この男の相手をしろと言われるのかと思うと、多美子はますます腹が立った。

沖津がしきりに目で合図をするので、仕方なくトイレに行くふりをして席をはずした。

「頼むよ」

トイレの前の柱の陰で、沖津が手を合せた。

「いやよ、あたしは白人以外は絶対に断るわ。生理的嫌悪で受けつけないんだから。第一どこの国の男なのよ」

「そこをなんとか頼むよ。S国の大切なお客さんなんだ。向うじゃ、すごく偉い人なんだから……な、多美ちゃんしか頼む人がいないんだよ。頼む」

「いやだ。こんどは絶対にお断りよ。あたしは商売女じゃないんですからね」

「とにかく、今夜だけなんとかしてくれよ」

沖津は、ポケットから一万円札を出すと、多美子の手にもりやり握らせる。

「じゃ、いいわよ。でも、弓子をどうやって帰すのさ。あの子は駄目よ、まだ学生なんだから」

「明日か明後日の昼間会うようにさせて、今夜はタクシーで送り返す。ぼくが先にホマを連れていつものマンションへ行ってるから、きみは一時間ほどしたらタクシーを拾って来てくれよ」

三

その晩、多美子が桜が丘のバースのマンションに行つたときは、時刻はすでに一時を廻っていた。

沖津と外人客のホマは、とくにマンションの部屋で待っているはずである。

エレベーターを動かしながら、自棄というよりもなにかめいいた気分だった。中近東の人間に体を与えるというだけで、肌にあわの立つ思いがする。理屈では

なく、生理的嫌悪が先に走るのだ。

部屋のドアをあけると沖津は、間のもとせようがな
いらしく、椅子に坐つてやけに煙草をふかしていた。

「今、ミスター・ホマは風呂に入っている」

ホッとして、救われたという顔だった。

「じゃ、ぼくはこれで引きあげるから、二時間ほどで
ホテルに帰してやってください。これが鍵」

沖津は多美子の手の中に部屋の鍵を落した。ホマ
は、明日また製品の見学で、横浜の工場まで行かなけ
ればならない。出来るだけ早く帰してほしいのだ。し
かし、そう手のひらをかえたようにはつきりとは言
えない。多美子に、いつものように鍵は入口のマット
の下に入れておくようにと頼んで、沖津は部屋のそと
に出た。

多美子は沖津が出て行くと、ベッドの端に腰をおろ
した。こういうときの成行はいつもきまっている。
ベッドの端に坐つていれば、向うが勝手にしたいよう
にする。

多美子の着ているものを、一つ一つはがすことで、
男たちはだんだんと欲情を沸かせてゆくのだ。そうす
ることに、若い女を獲物にする無上の楽しみがあるら
しい。

多美子は今までの経験から、最初は下手な媚など見

せないほうがよいのだとわかつている。出来れば、帽
子もレースの手袋も脱がずに、ハンド・バッグを手に
持ったままじっとしてベッドに坐っているほうがよい
くらいだ。煙草をすいたいのも我慢して、ベッドの端
に腰をおろしていた。

ホマはシャワーを浴びたのか、濡れた髪の毛を大き
なバスタオルで拭きながら、浴室から出て来た。パー
スのものか、チェックの派手なガウンを羽織ってい
る。いかにも好色な中年男に見えた。

沖津はもう帰ったかと、下手な英語で聞く。多美子
に、シャワーをとらないかとも尋ねない。

沖津がすでにいないことを確かめると、すぐに多美
子の肩に手をかけてきた。礼儀知らずの粗野な男であ
る。

多美子は思わず体を固くした。口もとから、羊肉料
理に使う強い香料の匂いがする。ガウンがはだけ、肉
のたるんだ胸もとには、胸毛というものが全然ない。
顔をそむけようとしたときホマの大きな手が多美子の
顎をつかんだ。

のっけから、唇をすうつもりらしい。多美子は体の
力を抜いた。どうせ売った体ではないか、相手がさい
なむつもりなら、こちらもそれを冷淡に眺めていてや
ればよいではないか。

はじめはそれだけの自信があった。

ホマの舌が、多美子の口の中で一杯にひろがり、動きはじめたとき、多美子の自信が一度に崩れた。ホマの舌が妙に熱いのだ。

今までにない経験だった。他人の舌を無理に押しこまれたときに感じる異物感ともちがう。口中に、熱い軟体動物をほおばっているような感じである。

多美子は耐えきれなくなってもがくと、体をよじった。

ホマの手が、多美子のスーツのボタンをむしり取るように乱暴にはずしはじめる。ブラウスに手がかかる。引き裂かれるのではないかと、多美子は自分で背中の中のホックをはずした。

ホマの性急さには、なにかに駆られているような不自然なところがある。今までの多美子の知っている外人、それも年をとっている男ほど、やさしいというのかよく心得ているというのか、一つ一つテンポをわざと遅らせてこちらをじらすようなところがあった。それがホマの場合は、間をおかずに多美子の体につけているものを、はがすのである。

ガーターとナイロンの靴下を同時にむしられたとき、多美子はあらがうのを諦めた。絶望的な気持である。目を固く閉じて、なにも見ないようにした。

ホマの重たい体が、うつぶした多美子の体を押し開いて波のように揺れ動く。喉の奥から洩れる荒い息が、多美子の耳にフイゴのように聞こえる。なにか滑稽な気持だった。

そのうちホマの毛穴から吹き出した汗の玉が、多美子の体に伝い、スーツの上に流れはじめた。それも滝のように流れる。多美子のお尻も冷たく感じられるほどだった。

ホマはなかなか多美子の体を離そうとはしない。ときどき苦しうに息をついて体をやすめると、また動きはじめた。

一時間も経つただろうか、ホマがふいに体をおこした。自分の国の言葉で、なにか言ったようである。

多美子には、なにもわからなかった。ホマの行動の意味がわからないのだ。

ホマは洗面所に駆けこんでいた。苦しげにしゃがんでいる。しきりにもどそうとしているらしい。

「どうしたの、大丈夫なの」

多美子が尋ねた。自分が裸にされていることも忘れていた。「大丈夫」と答えてこちらに向き直ったホマの顔が真青である。悪酔したのだろうか。

ホマはそのまま衣服を身につけると、多美子のいるのも忘れてしまったかのように、ふらつきながら、黙